

原爆を顧みて

1945年の4月、私は井口に疎開していた船舶司令部の功績係に勤務し、戦争に従軍参戦した個人の功績に関わる勲章を記載する仕事をしていた。

1945年8月6日、8時の朝礼を終えて事務机の前に座り、仕事に懸かろうとした時であった。

強い閃光が突然あたり一帯を照らした。窓に走り寄ると広島市の上空に太陽と同じ色で、大きさは八十倍もある青い玉が、平素見る太陽とは比較にならぬ強烈な光を放ち、見渡す限りの視界内を車輪の矢のように、七～八秒にわたって照り輝いて輻射した。視ていると顔の右半分がジリジリと熱かった。其の時下士官の人達が机の下に入れと叫んで廊下を走り回った。机下に入って数秒後、強い衝撃音と爆風にガラス窓は飛び散り、重い書類や物体が浮き上がり空中を漂った。

広島街は、強い熱線と放射線に犯されて、焼夷と破壊の地獄と化し、人類史上かつて無い惨状をもたらした。

炎天の市街地から西に向かってJR線北側の道路を歩いて来る人びとの衣服は破れ裂け、黒い雨粒がペタペタと全身にくっ付いていた。晴天続きでパタパタと土埃の立つ道路を非難して来る人々は引きも切らず次第に増えた。着衣と皮膚をぼろのように垂れ下げて歩む人、重症者を大八車に乗せて歩む行列が延々と続いた。

私たちはその路傍にテントを張り、日の暮れる迄お茶の接待をした。

翌朝7日、軍の救護班がテントを井口電停、JR線路の北側に張り緊急の救護所を拵えた。そこは、私の家から3分程の場所であった。私達は直ちに治療に当たった。

行列をなして順番を待つ罹災者の皮膚はずりりと剥げ落ちてぶら下がり、塗布する薬は白い軟膏しかなく、ざくろのような傷口に無数に突き刺さったガラスを懸命に取り除き、消毒液を塗布する作業を早朝から日の暮れる迄、連日取り組んだ。白血球の減少の為か、1日でも治療に見えない人の爛れた傷口には、無数の白い蛆が蠢いて蛆やガラスをピンセットで内部まで取り除く時、痛みの反応は全く無かった。神経が麻痺していた理由が私には今でもはっきり解らない。

6日朝、私の家では母と兄が茶の間の窓から強烈な光と赤い大きな玉を見た。兄は、広大近くに住んで居た母方の祖母と叔父を捜しに行った。叔父の家は爆風で破壊していた。喉の渇きの為壊れた水栓を捜して水を飲み、引き返してみると破壊された家屋は熱線により全て灰となり何も無かった。

この辺りの重症者が島の島に運ばれて居るとの情報に、9日の早朝、私は軍が出して下さった船に乗り島の島に直行した。其処には全身が紫褐色に膨れ上がり、幽鬼の如く変り果てた数知れぬ多くの人々の群れが地面に隙間なく並べて放置され、『水を、水を』と訴える

人、『殺してくれ』と叫び呻く人、息絶えている人々の群れで足を踏み下ろす場所もない胸の詰まる惨状であった。そこには一滴の水も、消毒液も塗り薬もなかった。防空壕は多数あり、被災者は奥の中まで居たが祖母達は見付からず、再び船に乗った。帰りは、大田川の支流が市街地を流れる七筋の河口に近い海を通ったが、波の中には、原爆の熱線と放射線に焼かれ、水を求めて川に逃れた夥しい被災者は死体の群れとなって、引き潮の海に流れ出ている。何とも言い様の無い哀しい、悲しい死体が海中に夥しく漂っていた。途中二機の米機が飛来し、小さな船底にじっと伏せた。正午頃井口に帰り着いた。

祖母と叔父は一週間程して我が家に辿りついたが、原爆症で逝った。

8月6日朝、義父(舅)の梶山秀蔵も横川から市内電車に乗る時、同じ電車から降りる知人と互いに挨拶を交わしたと、知人からの証言があったが、乗った電車は途中で黒焦げになり、義父も不明のままである。

顧みれば、大東亜共栄圏と云う、錦の御旗のもとに推し進められた侵略戦争の悲惨な末路であった。

世界へ廣島の惨禍を伝える意義は、核兵器廃絶を願う祈りのメッセージとして活かして行きたい。

人類の平和な共存を願い、核兵器の悲惨さ、白血病の恐怖をヒロシマから世界に伝え、神の創造のみわざに結びつく平和が人々の中に訪れますように祈り願っています。

原爆で逝った多くの人々の靈魂に、神の恵みの平和の安らぎが、永遠にありますように、世界平和記念聖堂より心から祈っています。